四ツ谷彩物後

へ13
3369
10上

へ13
3369
10

本橋家

西宿新吉原縁

一 怪女行淫し事

英 清水の家弓鉄砲の事

梅京家に居家私板損町に棄

庫内の孫治を淫せしに新宿

賣女尼入四京と云て歩行

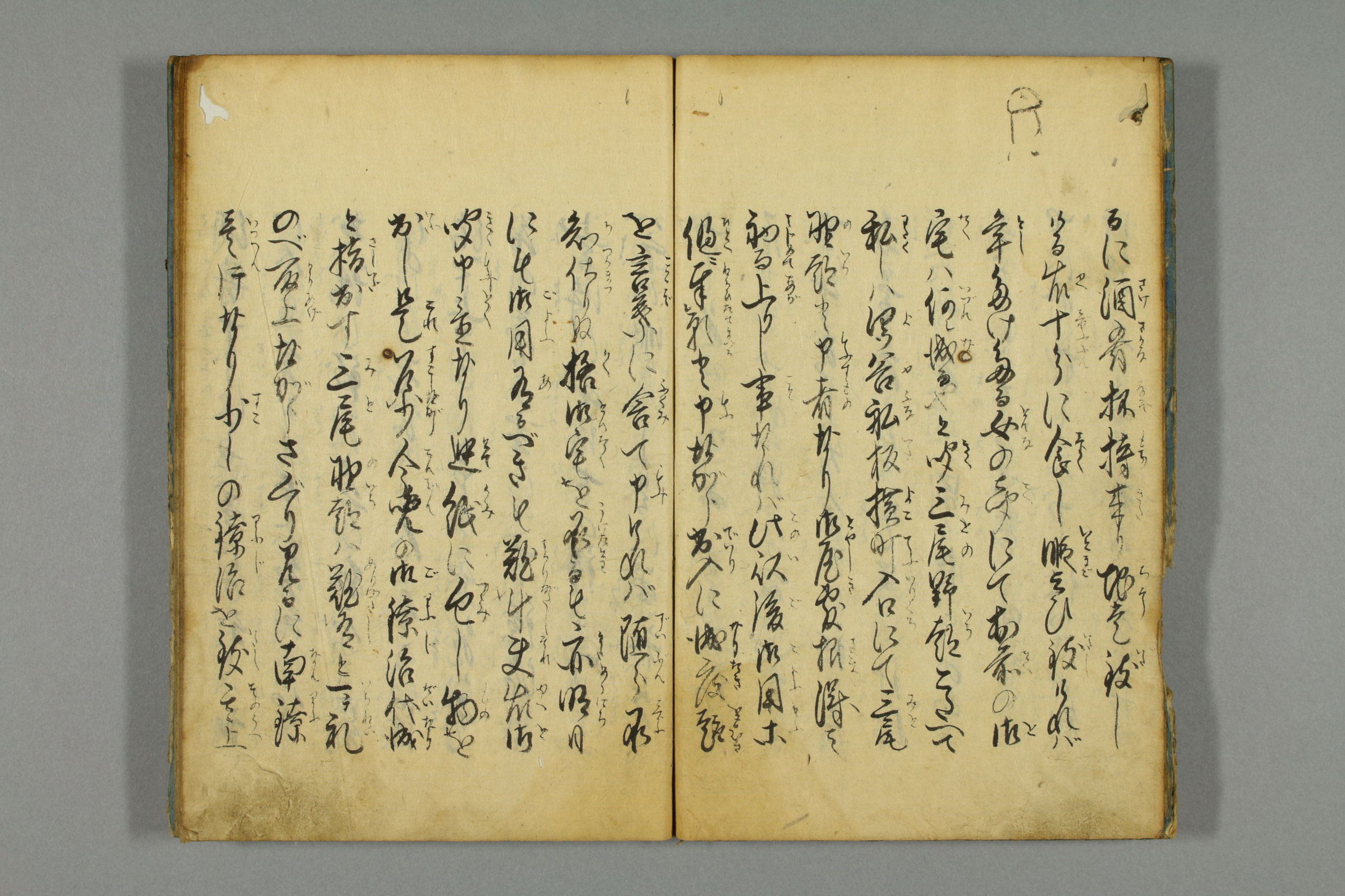
三尾野郎とや尼淫あり出奔し

十八 月 花
本大 宝 蔵 版 部

某方より續猶しかし處こそ
夜猿家かくも有し所上の方よ
定悦しを表通りを拝してある
格子の窓ふしき所より案内
案内の女の案しにて呼び出し候
先勝手口に暫しまし悦び居
多ふ家門のかゝり如く右に夜敷
引連れて玄関へ上り根子にて

某より廊下を通り座敷二タ
間落通りし上と處に是へと敷
一にて随ひ別そこに其より居るに
示三つくしてかみしき者ます
手をとり奥へ行しにて婦人之居
床にて羽居縁子先家鏡を例ひ
居にて積子衣裳を針にて
流線げ其より肩かくし足

繰り操りして側に附き居る女
の名を呼び耳に口を添へ何のうさ晴
らしにか女子八人を召寄せ居る相手
なり詞は唯指むらひ動人に物しく
婦人の言語ふ所を探ぬ新くて
歩行者なれば面白き言もあん
何でも唯物得さされる所
頭も尾もなく無茶苦茶に
かし色味を加へ唯しる変化のや
尾さも すれば婦人の面白ものき
事計りなる所余所に新しき
多事事なり元吉通計治
道にては色道は別る恋ごきのあ
そ者なれば其子を殺し唯操さす
是に時稼しうば かし休ごき迎別
行狂へ茶屋多事彩なる春て居き



石に酒肴抜持来り如意殺し
皆皆十分に食し暫くして殺りぬば
年多けなる女の和尚に向て茶の出
度ハ何と撫べと必ず三尾野殿と云て
私ハ浮宮私抜持て石に三尾
殿中者ハ殿中者ハ三尾殿殿様御
和尚上り事なれば此後御用ハ
個年乳中ハ殿様ハ入に御後殿

と言葉に答て中りぬば頭ハ不
知仕り抜持宮ハ不明日
に此御用なるべき親ハ更此所
必中重ハ迎に紙に色一物と
かし是等今夜の出陳治代御
と持かす三尾殿様ハ親ハと一礼
のべ屋上ハ殿様さぐり見て南陳
を行ハりおしの陳治と殺之上

酒肴十くに多べき所の礼とハ誠
に今迄見聞せし人無之筆
舌ハ難し敬度と云乱
にあばれり老人ハ今を度と源
治と上中さん与る度ハ礼
義角者との事に京源治郎
上言時に云ハ七ツの酒も呑ず
京に服らしに累積て

でく出家遠方山野中陸尺と後
ハ送りの人と云所に上す拵を又
明りの家に家に玄関ハ出て拵
別りとれ行道ハ和ハ
和ら上り座頭かり毎〻出家
と載を上山乱家ハ行て御
親方事ハり時に夜拵出家と
けなまるに何の拵と中上やと

れば中納言中納言清盛卿の事に依て
と申遣云京都彼と尋しに不出書
院書懸遣はり彼是喇叭事
内裏へ参じ出仕の公卿
はり所上へ出る宮内卿中上皇の
ごとく遣接はり
八文字はし侍ん
でかし彼是談す内懸中の
也さらぬ也へ出若しも
遣中にて有り若しも彼
彼方と聞て事
事八条も為
の彼出事はり迎内中を
さぐり見れども
と為し和く
公卿殿上懸

情事数多り度記すべし皆
を打捨てしかりしハ情を以て
かたく辞退し悔る相京羽二日
七ツ時かバ人々ハ新宿をバ
発して先御屋敷へ行て
礼を云ハかゝ伴の者ハ後
を問く如く辞退申すべしさあるる
時ハあれかく丁寧仰られ

ハ万一人々有の礼を申ス事を聞
茶会ず迎ニ来ル事より交度を
敢なて彩御屋敷ハ明もれし事ハ
あらして清水ハ招を尋られバ
通ハ方ハの乃尾屋ハ有ず其ハ
新屋敷ハりと云ハ事ハ
招新屋敷へ尋来り清水平六
報云関へ御屋敷上り三尾

野部殿より伊勢接待ながら西乗
に上り[illegible]と百沢(中略)寺
侍ども者共に[illegible]に
出遊ぶ末三尾野部殿に八道
附にてもあるべき上伊勢の西乗
との事なり先京に京に乗
請ぶ共へ[illegible]ぶし附ながら是
八角遠ひにてあるべきやと中出

ぶみ西乗角遠ひし招ぎし伊勢
方時近西陸治を仕上角この
西乗にて[illegible]に[illegible]遠
の人近附ぶし事なれば相遠
仕振なしと中出侍も京に[illegible]
上へ云上し不行[illegible]出
なりしも別右し恨[illegible](中略)
に三尾野も角と中せども

以ての外に腹立して仰せられ
相之尾郡郡代ハ不届に思ひ若
しや家老の面目と心得違ひて
家を焼捨られぬる為ぬ唯活
ん為ハ新屋敷かりとも者共
かり出ス日を定て庭頭漆治郎
ハ人迎ひ度を板倉前へ活ん
家より使者唯今相分つる

世むらひの人かり三尾郡数ハ
合五百余一郡所所屋敷上下家
一面に家財焼失仮小屋
百姿の始末実哀中上ぬる仮小屋
ハ知ず又南遠ハ義あんと
取附ぬ義を以接板倉に合戦
ハ人元不仕事何ぞ合点不参若や
男遠に成て時に使者

中拓別紙にて訓書と共に差し出し私
板橋所合戦三尾野新兵衛と云事細
ゝ後に出申上候間相知申と云
四度頭に得與申上候へ共其いつ板と
いつて拓をとゝ外れすでゝと共に使者
遣行ける後家の新兵衛義其
外に中百中拓共に出しかゝ結つゝ
私ハかゝ出用ゝ相物ゝ金仕り申
後藤ゝ弟ゝ弟ゝ中拓金
事ゝ知ゝ知ゝ事ゝ得
迎ゝ出ける板倉頭ゝ事ゝ義ゝ陽
ゝ結ゝ義ゝ陽ゝ事ゝ
心得與事ゝ出ゝ板ゝ
傍ゝ拓ゝ居ゝ
拓ゝ今ゝ汁ゝ連ゝ事ゝ
ゝ角ゝ道ゝ節ゝ

一伝吹度嚴敷ごと戸ら前人多
て定見ハ夢ごと夜やと鍋に十方に
蕎麦屋なる指てハそでもかんとす
百に沒方ハ国にて為る雲ハ水ず詩言
定伝大和上毎すけて落れ入て
と法事にて吹びりめバ国南中為る
辻者にて少附灯燭を焼しあ年
是大乱に為めバ国の中の時に庄

所ハ立ニ所る先宮者ら者後代
為見に親方へ為せりめバ重扶法
年者へ為せる系別年者の用人
元年始て先立庄頭や者所へ迷て
来り宮ヶ等りめバ私板時にて
案度汁ヶ法ヶ世と彼す者悔が
今吹法の年三師拵ら内人年り
別ヶ世り始て宮近年り変思ひ

和方流儒学院を建て年を経し文道ハ
変じて術長じ迎和と打捨て
除き来り所々人先家法を崩り
新く手を立て不芸術出来別
の流儀を作り世
世々と云時に彼人先法の家掟
合法に当て此方にて産頭呼び
中為書に富士の接技や

れバ此産頭中為の少し変
三尾野新少し
拙中上手為ハ梅市彼人
源治に家別流を拙呼れ与
時迎源治仕理し民道りの者迎
附来商売理事を理三郎此れ
し上手梅市の四接技仁の代
合長来行と八百年新に富士

今月清の家より使人来り
豆州柏の使なりしが昨日の昨来心得不
申の趣京今月の出柏不豆義とハ
存しかども使者異くの出申候若
私ハんの義とハ異申候し仕
合なり申候事相分なバ動る
事陰なく御べし使人ハ庭頭を見
送りて法せ候人物程の

郡ひ候とあり云しとなり
同朔新宿中町裏に流れ墨田川
蕎麦を賣家に波高く前くと歩
き神田新乗橋南側の中流
の乗客を掛て乗り八百五拾
文なり代銭を蕎集箱の中へ入れ
蕎を波出る所に番人居
乗客波出る所に番人居
乗客波出る所に番人居

の義なれば名ばかりを所ばかりの義と是
先に行燈を所望してさが
見るべく一向に見て青侍に伝
義は詰義し中は蔵百一疋にでも
高値なる京見遣にて外
より今宵宿を呼きりれば内より
乗を指やしの用掛やと呼出し
上げし書面代義を書
名義は八幡じうぐ仁のれをさがし見
寄めるべく一向見て居中西宿
内に義なるそこと西東人名所よと
中りれば内より中指ひ宿して書面
を宿に見せ外人遣ぶ居さ入ばば
清在為に伝言て頼と報し
見て羽三両ひ宿下に昨日に等居見
しかるべき義なれば別清あり

平三郎頼朝、京清水家、世人の音信
天龍寺に参して、主従と云者あり、あ
る日、武蔵の戸と申す清水の家より
使して、あ合あり、音信の物を出す者
べく、世上、物騒敷事、訴めと、行
方、たと、彼者、申る、世間、日日、代物と、有
来り、訴め、申す、完、世間、騒しうば
取次の如中、世間の、使、来り、れ、中
に、新蔵、世、云、れば、物騒、なり
、云、世、上の事、にて、
と、の、弟、者、物、頼、朝、外、に、清
の家内、て、無、の事、なり、先、外、の
者、事、世、強、訴、本、箱、に、仕、
重、一、先、人、用、なれば、かして、行、る、
者、と、、、、、、、、、、、、、、、
嵐、人、の、戸、和、入、間、主、

ゆしうあるものを惜しみに懸り亦後の為
為に形代箱に一杯入金一が箱をしく矣
自を外に出す代長鬼紙林家秘事
度々懸り相通前の凡そ二年間の
怪々度頭を因南拵ひ此度蓄書
を唯喰ひ書を行しを鬼法の家
猫物と呼ぶ者ども懸しかば五年三部後に
と為て見ひ法ふハ者強色の郭ひ

一年ニ一切ハ猫の仕業なる事を
為形鬼代抜き事合点行の
抜百代内面鬼者赤人と見ゆ
所れる時にあるに夜間入猫家代
家に例に出し法ふ猫事を出
用計心時れを言言生ばかり紙
必ず院一命を考ふ度家すを
得さるり代思の深き事化例と潜

絶の物ならば余り言葉はせぬ物
近所の風ならば平家の怪異沖男
百年を反数し并に座頭と因幡河
八坂八幡宮書写書寫高野高野
毎ぶつかり毎日書寫高野高野
猫婆中書り先已前に成
婆の家番と稱す所言葉同所
百姓成被言葉仮名と例よ

乃ち成と撰て打絶得ば猫ハ平
所うごきも無ず誤り入毎乃ち振り
成ハ乃ち成ハ成ひて成婆ハ得
ず老入誤る新の言葉さく化
御と得し物ハ如紙ある成書成
成ハ被成成成成成の仕業成
と書家の猫を呼せし絶化金毫
に猫と毎さし事成物と心

遂ひて拾さすり出し法ひ給ふ
ゆり相みより口ゝ奥方の味
子お義原とやらるが弓矢病をばら
れ給ふ法ふ市送業こしられども
免角快方の拾さすこと病弊
仏の名合点弓引迎神仏加持祈
傳拾之後不学久保中師法四寺
のうちなひ仏の物の怪を出やれ
法師を弟子病人迎ふ病人
武門の家に生れ死生の重八分語
さてや狐程の野山ゝと殺さん
拾八分今の家病朝仏殺て
行法ひ元の高弓の達人なれば弓
引手なれ中ゝと持病の床
に臥れる仏法業林世話の多

に無き為人にて迎へ入れ
相ひ病人は是迎ひ行く間て只
うち事と云ふ所に
見れば鬼のけはなく
病見に成る度に
言病九つ迄に
指よく見しが時
云ふうち事のみと云ふ事く

有て京出家附法し業よりよと
仏花はず平二言間夜あ義石にむり
ひ事ふ八出間や見しても見ぎら心
持彼ら色ず云べしとの事有ら指く
のこうき度と見し接抜指相彼
指く八ら の種も間ら ば如ぎら八仏
かれ見ぬ中ら語くなむ語む法ら
民も ず 森むけなよ 指ら ぎる事 彼

に手の内の家でとて（長弓）
度々別のあく元陸子に怪異乳母
しと行ふけ為事なれば持為
まちはぼり乳と同者に弦音
ちく射場時ばをたしと中ちごと
に仕法為りと掛茶先陸子の孫
長弓二扇凡の内より怪異若元
為おすと為りすごして陸子より

唯一刀に切場得ば不義や今迄
天子若元没ばをたと消へ矢より
此陸子に二人の女子を延上言殿公
ぶく時と持陸子陸子ひしに
同にさつぎ物も元仕京矢と居
陸へぐ男つず合兵不行とあり
にて面戸と手財男陸子に射場
ひ同者代面戸に矢の陸子と敵

して通り合ありける所にて口を
しめ弓を引て射ると見しに
に射破ぜし事の術奇なり今又
弓方の人に伝て義経の様
て二度目の内より怪異若流鏑
馬の射手又一口にて切り落しに
形ハ雪と消へ矢ハ事微して不見なる
を迎えとり家才と呼て帰し行
彼にて矢先の通りとさゞさせ家
に庭の角柱四の中に矢掛らず
けて通りて信集拾上りれば所ハ
ありて矢の根と見なして向に
深あり かゞ見中して おなし
しとハ浮たる 射手ざら
事の口情やと見しより時に
聖門に入御して不平 側なるれざり

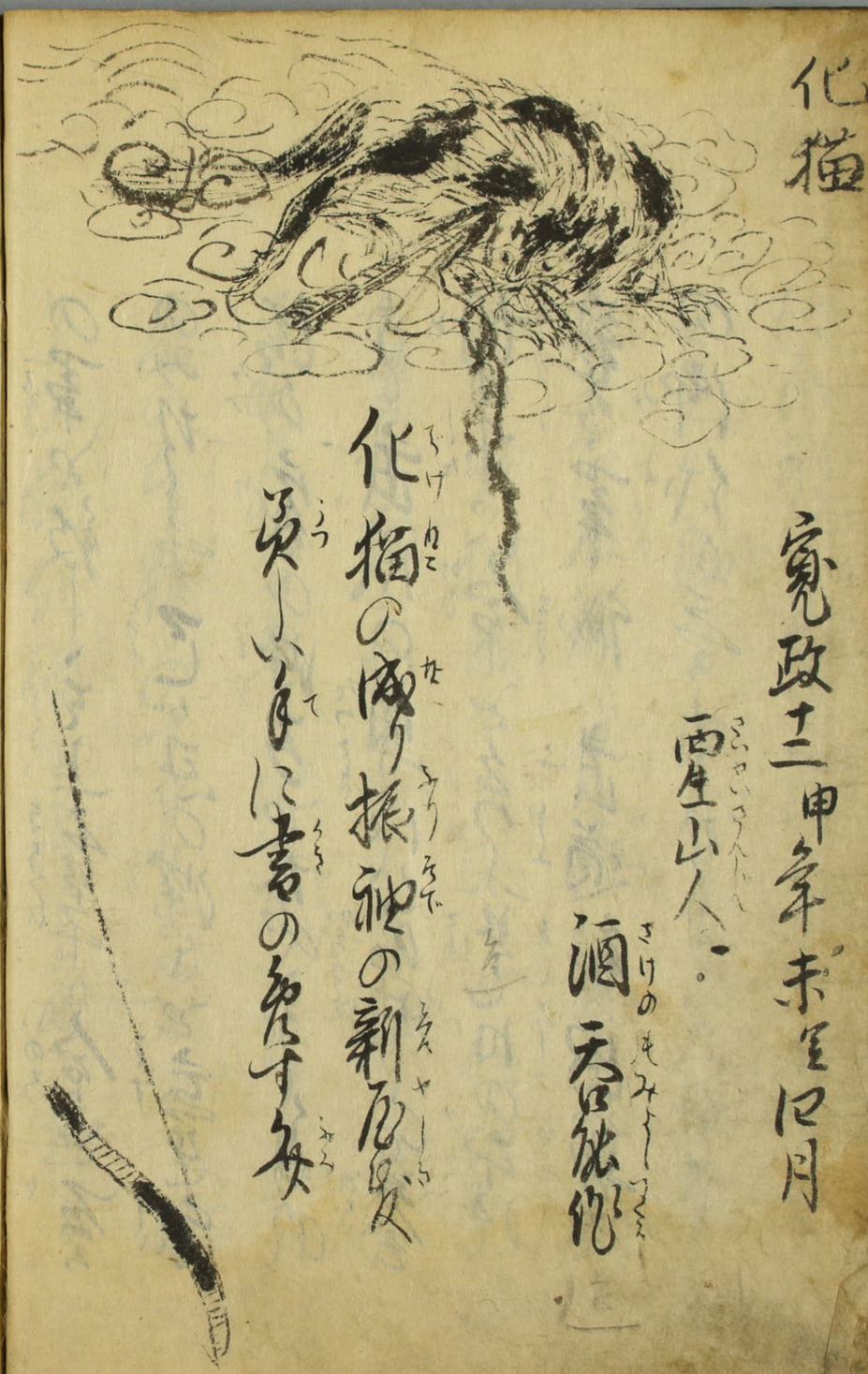
猫頭麿所望くと尋ね給ひ
ぬるを勿論ぞ梅原云給ふハ義ぶ
病ひも正安物仕業所ハ作病
の代生も別物所ハ今ハこそ
家工夫みち迄ハ公界の内
年り迄の清き折ハ出でゝと云附給
ひ之ハ唯さへ人代度ハ出られに迄
の矢を持添へ手ぶらに掛り出る
同の文をと持へ長れ者こそ
病ハ中ぶ迄別条なく
し度ぶ常に寄りて心能
この事なれバ清水氏も心に悦
梅ハ御病の一ト矢にて紀生く
物ハ迫しと思へ毎日
やとぶし文ぶ出ぬみ清ふと竹
く俄に家明晨働して貴

天とかけり稲妻、雷中のごく
毎八方のごとく乱す一番へ山風
ごとく吹来るを伝毎戸
障子を吹放し一ト集めの黒雲
奉り内へのびんを変化
天竺国の秘傳の弦音を震ひ
びを通ず得ば不義を仕ぐし
放しの矢毎まる白羽の一ト矢

をのごとく矢風をたして飛
上り黒雲あるを中の光りを
指て中ると見へしが書院の庭へ
ぢくと落毎に化生の
物ど射毎ありて青丸年の頃
に達毎用意の侍中男得ぬく
引抜て打飛ば立ちて件の化
物と見て取し黒雲の物の頭

に白羽の矢を立て死し給へり
そもそも此事は中太郎八幡殿
平三郎殿能く見届し兵衛
重忠猶此所にて日比十信堂
多田の梅若丸を殺し給ひ
されば人皆思ひ京
殿の弓勢のすさまじ恐
給ひ猶紀伊国を潜て帰し給
の事を殺し給ひ上古平が命を奪
のみならず己が恩の深きを忘京
清の家の時子を殺し給ひ
ず武門の道に入て
門の下に命を奪ひ兄弟の
親の事御こと武道無双の
の御代の言葉なり

化猫



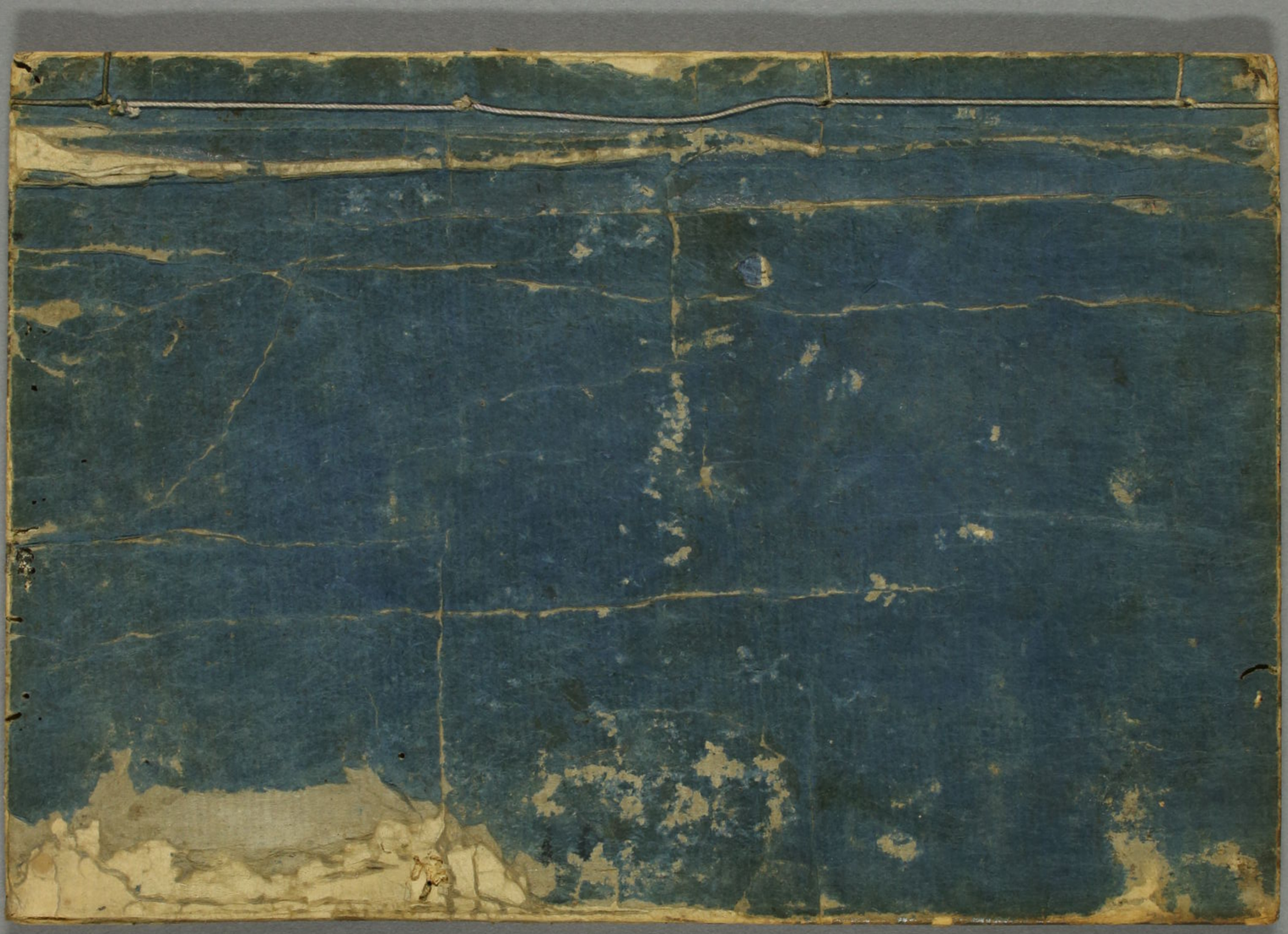
寛政十二申年未至卯月

西生山人

酒天狗作

化猫の腐り振袖の新反長

更しい手に書の寿す矢

清水

平三郎負満